

持続可能な笑顔のために ― 2020年私の挑戦 ―

岐阜県 富田高等学校 2年 小澤 伸也

「ラオスの人が本当に求めているものって何だろう」、ふと浮かんだこの疑問がこの夏の私を考えを根本から変えた。

私はこの夏、5日間をラオスで過ごし国際協力について学んだ。4日目の夜に浮かんだのがこの疑問だった。ラオスに来る前の私ならこんなこと疑問にすら感じなかっただろう。「発展」を開発途上国の人々が第一に求めるものだと思っただけでいいから。それでもこんな疑問が浮かんだ根底にあったのは研修全体を通して垣間見えたラオスの人々の幸せだった。もともと私が想像していたラオス、そこに笑顔はなかった。「後発開発途上国」「アジアの中の最貧国」、こんな言葉だけが私のそんな想像をより強くした。しかし実際のラオス、そこは笑顔であふれていた。何百もの笑顔を見た中で今でも強く印象に残っているのがナイトマーケットで見た笑顔だ。私が散々悩んだ揚げ句、何も買わずにお店の前を去るときさえ、お店の人は「コプチャイ」という言葉とともに満面の笑みで私を見送ってくれた。その笑顔を見たとき私はラオスの人から幸せを分けてもらったようなそんな気持ちになった。笑顔を通して人と幸せを共有する、これは日々の生活の中で自分たち自身がしっかりと幸せを感じているラオスの人々だからこそできることなのであろう。ラオスの生活は日本に比べると何倍も何十倍も不便だが人々の心は日本と比べて何倍も何十倍も満たされているように見えた。

私はそんなラオスの人々がうらやましかった。だからこそ私はラオスの人々が本当に発展を望んでいるのが気になった。そして私は夜、ホームステイ先のホストファミリーに尋ねた、「ラオスが今後もっと発展してほしいか」と。すると返ってきた答えは「NO」だった。なんとなく予期していた答えだったが最後まで「YES」という答えが来るのを願っていた自分もいた。とても複雑な気持ちだった。そしてその後この答えは私に更なる気づきを与えた。

私はこれまで国際協力において一番大切なこと、それは「相手国の発展」であり開発途上国の人にとつての幸せ、それは「自国の発展」だと思っていた。そんな中であの夜「NO」という「現地の声」を聞いたとき私は気づいた。これまでの私の考えが大きな間違いであったことに。考えてみればラオスには現在49の民族が存在していて、全ての民族にそれぞれの歴史があり文化があり生活がある。今後ラオスが発展していけば生活はもっと便利になり、生活様式も新しい形へと変化していくだろう。しかし発展という言葉の裏には同時にそれまでラオスの人々が刻んできた歴史、築いてきた文化や生活が壊される可能性が隠されているのだ。ラオスの発展が完全な形で人々の幸せにつながるのかと問われても私は自信をもって「YES」と答えることはできない。私たちの国際協力が「発展」を意識しすぎたものになることで、それは現地の人々を幸せとは反対の方向に導きかねないのだ。それでもラオスのためと信じて国際協力を進めるのは果たして私がこれまで目指してきた姿なのか、いや違うだろう。しかし一方で相手が現状に満足しているから、発展を望んでないからという理由で国際協力から手を引くことはラオスの人々の未来に幸せをもたらすことができるのか、できないだろう。

私は何度も何度も考えた。それでも後発開発途上国からの脱却を目指しているラオスにとつて「発展」が必要なのは事実である。そこで「国際協力が一番大切なことは何か」という問いに対して私が

新しく見つけた答え、それが「協働」だった。これは私たちの協力を押し付けることでもなければオスの現状を放置することでもない。「協働」によって、私たちの協力が目指しているものと現地の人々が望んでいるものの融和を図ることができたとき、私がこれまで目指してきた本当の国際協力が実現するだろう。2020年それは国連がSDGsの達成目標期限としている2030年まで残り10年の年だ。そしてその10年における国際協力がSDGsの達成の鍵を握っているだろう。「協働」の実現に向けて、そしてその先にあるSDGs達成と開発途上国の発展に向けて、まず私にできることは「現地の声」をしつかり感じ取り現地の人々が本当に望んでいるものを理解することだと思う。

だから私は大学一年生となる2020年、開発途上国に留学している。現地NGOにおいてのインターシップや教育現場の訪問、教員や学生との交流などを通して現地の生活の一番近くに行くことで「現地の声」に触れ、現地の人々が本当に望んでいるものを知りたい。そして将来はその経験を生かして教育者という立場から開発途上国の発展、SDGsの達成に貢献したい。この地球に生きる一人の国際人として私の挑戦はもうすでに始まっている。

